

留学生による異文化相互理解の認識に関する質的研究

A Qualitative Study About The Perceptions To The Cross-cultural Understanding Of The International Students

石	鍋	浩	ISHINABE Hiroshi
安	龍	洙	AN Yong Su
松	田	勇一	MATSUDA Yuichi
全	成	燁	JEON Sung Yeub
朴	寶	根	PARK Bo Keun

概要

グローバル化や社会の多様化などにより、留学生と日本人学生の相互理解の意義が重要視されつつある。留学生による異文化相互理解に対する探索的検討は今後も求められる課題であるが、留学生の認識の検討はまだ十分ではない。本研究では、日本での暮らしと日本人との交流に留学生がどのようなイメージを抱いているかについて質的に検討することを目的とした。日本の大学で学習する留学生4名を対象にPAC (Personal Attitude Construction) 分析を実施した。3名は「日本での暮らし」と「日本人との交流」に分かれたクラスター構造の形成が認められた。1名は「日本での暮らし」と「日本人との交流」のクラスター構造は未分化であった。また、対象Aから対象Dは留学先である日本における実践を通し、認知的・感情的・行動的局面において「気づき」を得て認識を形成した可能性が示された。本研究の結果は、日本人と留学生相互の異文化理解を促す素材としても応用可能であることが示唆された。

キーワード： PAC分析、留学生、日本での暮らし、日本人との交流

1. 背景と目的

グローバル化や社会の多様化などの進展により、留学生と日本人学生の相互理解の意義が増してきている (加賀美1999、坂本2013)。また、留学生が異文化間教育、特に日本人学生の異文化理解に果たす役割 (中野2006) や日本人学生と留学生が共に学ぶ意義なども先行研究において示されている (高橋2005)。大学における日本人学生と留学生との異文化間交流は、大学の国際化において重要な課題であることも示されている (加賀美1999)。

日本人学生と留学生の協働的活動がもたらす効果についての検討では、日本人学生と留学生は信頼関係を徐々に形成し、より高次の活動へつなげていき、双方向的効果が認められたことが示されている (神谷・中川2007)。日本人学生と留学生の混成グループによる討論を中心とした授業の実践研究において、日本人学生にとっては留学生が、留学

生にとっては日本人学生が、異文化を理解する上で重要な役割を果たしていることが示されている(高橋2005)。「学生自身の自己モニタリング能力を高めること」と「異文化を広いフレームのなかでとらえ、スムーズにコミュニケーションする能力を身につけること」を到達目標とした「異文化間コミュニケーション」の授業の実践報告では、「自己を客観視し、異文化間コミュニケーションのスキルを身につけることができた」などと参加学生から報告されたことが示されている(園田ら2006)。

その一方、日本人学生と留学生の相互理解が円滑に進まないこともある。日本人学生と留学生の親密化阻害要因についての検討では、留学生側から(1)日本の慣習、(2)言葉の障壁、(3)関係づくりへの抵抗感、(4)興味なし、余裕なし、(5)希薄な主張の5因子が、日本人側から(1)無力な暗黙のルールが通用しないことへの不安感、警戒感、(2)漠然とした不安と遠慮(なれていないための莫然とした不安やいらぬお節介になるのではないかという遠慮)、(3)言葉の障壁、(4)日本人集団への消極的アプローチの4因子が示されている(横田1991)。また、異文化間教育においては、「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」の3方向からの総合的なアプローチが重要であることが示されている(川那部2006)。日本人学生と留学生の相互理解の阻害要因の把握や異文化間教育実践の場における総合的なアプローチが今後求められる課題である。

留学生による異文化理解の検討も行われている。日本社会での共生を模索する留学生像(石鍋・安2018)や、日本人を理解しようとする留学生像(松田・安2018)や、日本社会で出会った日本人などの環境の要因によって異文化理解に影響を受ける留学生像(青木・安2018)などが示されている。

先行研究において、異文化理解および異文化コミュニケーションの意義が重要視されることが示されており(井出2010)、留学生による異文化相互理解の認識を探索的に検討することは、グローバル化や社会の多様化がさらに進む日本社会において今後も継続的に求められる課題である。その中でも、日本での暮らしや日本人との交流などに対して、留学生がどのようなイメージを抱いているかについての質的な検討はまだ十分ではない。そこで本研究では、留学生が日本での暮らしと日本人との交流にどのようなイメージを抱いているかについて質的に検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象

A大学に留学中の留学生4名(対象A、対象B、対象C、対象D)を対象とした。調査は、2024年1月と2月に対象ごとに個別に実施した。

2.2 P A C分析の実施

対象Aから対象DにP A C(Personal Attitude Construction)分析(内藤1997)を実施し

た。内藤 (1997) では、PAC分析について、多変量解析を取り入れた少数事例に関する詳細で客観的な分析を行う手法であり、連想刺激の操作的手続きにより、対象の内面へのアプローチや対象自身の問題について気づきをもたらすことなども可能であることが示されている (内藤1997)。本研究では、Eメールのテキストによるやり取りを通しPAC分析を行った。対象Aから対象Dには、事前に研究の目的、研究協力の任意性、匿名化によるプライバシーの保護、協力同意撤回の自由について、Eメールによる文書で説明し、本研究への協力の同意を得た。

調査は第1部と第2部から構成した。第1部では、初めに、以下の刺激を与えイメージ項目を質問紙に記入するよう文書で教示した。イメージ項目記入は10個以上になるよう教示した。

【刺激文】 あなたは「日本での暮らし、日本人との交流」からどんなイメージが思い浮かびますか？日本で暮らして大変だったこと・苦労したこと、日本で暮らして楽しかったこと、自分の人生やこれからの人生設計にためになったこと、日本人と交流して感じたこと、その他（もしあれば）を「単語、または短文」で下の**【質問I・記入例】**のように**【質問I】**に記入してください。全体のイメージ項目が10個以上になるようにしてください。

イメージ項目記入後、そのイメージ項目を重要と思われる順序に並べるよう文書で教示した。次に、各順位イメージ項目の組み合わせが、直感でその意味内容においてどの程度近いかわかる7段階尺度で評定するよう文書で教示した。イメージ項目と7段階評定の結果を指定のメールアドレスに返送するよう教示した。第1部はここで完了した。

第2部では、Eメールで受け取った7段階の評定結果に対し、対象ごと個別にクラスター分析（Ward法; HALBAU for Windows Ver. 6.24使用）を第2著者が実施した。クラスター分析の結果得られたデンドログラムに対し、第1著者と第2著者の2者間においてクラスターの分割点について協議を行った。協議後、デンドログラムと分割点の案を各対象にメールで送付した。対象は、デンドログラムと著者からの分割点の案を受け取った。受け取った案に対し、検討を行うよう教示した。分割点は、各対象が判断し最終的なクラスターの数を決定した。

Eメールテキストと添付ファイルのやり取りを通し、各対象が決定したクラスターの解釈を求めた。解釈は、クラスター（教示文では「グループ」）ごとに教示文を示し、続いて自記スペースを設け、テキスト入力にて記述するよう求めた。

クラスター解釈終了後、各イメージ項目に対し、プラスイメージ（+）、マイナスイメージ（-）、どちらも言えない（0）のいずれかで評価をするよう教示した。また、各イメージについて、そのイメージを抱くようになったきっかけや媒体などについて記述するよ

う教示した。全てのクラスターに対する解釈を記述した後、指定のメールアドレスに添付を送信するよう教示した。

PAC分析の結果に対し、以下のリサーチクエスチョン (R. Q.) を立て、象Aから対象Dの認識について質的に検討した。

R.Q. 1 日本での暮らしに対する留学生のイメージにはどのような質的な特徴がみられるか。

R.Q. 2 日本人との交流に対する留学生にイメージにはどのような質的な特徴がみられるか。

3. 結果

クラスター分析の結果、対象Aから対象Dのデンドログラムが得られた (図1から図4)。デンドログラムの縦軸は連想イメージ順位、横軸は連想イメージ間の距離を示している。図内に各連想項目イメージと各クラスターの解釈がデンドログラム内に示されている。各連想項目イメージの端には、各対象のイメージへの評価がプラス (+)、マイナス (-)、どちらとも言えない (0) で示されている。また、各クラスターについて紙面による調査を行った記述結果を斜体字で示す。記述結果の一部に文法的誤用が含まれるが、文意を損なわない限りそのまま記載した (以下同様)。

3.1 対象Aの結果

図1は、対象Aのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Aは12個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1位、2位、3位、7位の4項目であった。クラスター2は連想項目順位4位、5位の、9位の3項目であった。クラスター3は連想項目順位6位、8位の2項目であった。クラスター4は連想項目順位11位、12位、10位の3項目であった。

クラスター1は、1. 空気を察する能力 (0)、2. 言葉遣い (-)、3. 交流する時に言語の壁 (-)、7. 日本語能力を高める (0) の4項目であった。対象Aは、結果を検討しクラスター名を「個人的に交流するためにできること」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

コミュニケーションと言語の使い方についてのグループで、通称コミュニケーション能力です。日本人以外でも同じく、人と会話する時に察する能力と会話能力 (言語能力と関わる) が大事です。

クラスター2は、4. 内向な人が多い (0)、5. 他人とのコミュニケーション能力を高める (+)、9. 本音を隠すこと (0) の3項目であった。対象Aは、結果を検討しクラスター名を「他人に配慮すること」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

このグループではちょっと違って、「4. 内向な人が多い」と「9. 本音を隠すこと」は個人的日本人に対しての感想で（もちろん他の国の人は日本人に対してイメージも同じかもしれませんが）、「5. 他人とのコミュニケーション能力を高める」はAグループと違うところは、今回は自分のコミュニケーション能力の中で、「他人のこと」も含めて考えることです。例えば、私は日本人に対してのイメージは「内向な人が多い」「本音を隠すこと」で、この要素を含めて、自分は日本人とのコミュニケーションをする時になにを注意するべきではないかと考えてます。

クラスター3は、6. ルールが厳しい(0)、8. 自分の世界を広げる(+)の2項目であった。対象Aは、結果を検討しクラスター名を「異文化のルール知って、守って、そして自分の見解を広げる」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

ルールが厳しいということは比較的なもので、いいところと悪いところもあります。そして、自分の世界を広げるは「あ、こういうルールがあるんだ、国によって違うんだね、勉強になったな」という感じです。

クラスター4は、11. 交通が便利(+)、12. 旅行できるところが多い(+)、10. 食べ物がおいしい(+)の3項目であった。。対象Aは、結果を検討しクラスター名を「日本は自分にとっての美点」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

「11. 交通が便利」「12. 旅行できるところが多い」「10. 食べ物がおいしい」は、自分が日本に一年間住んでから感じた感想です。また、日本に行きたい理由（仕事、住みやすい、旅行）になります。

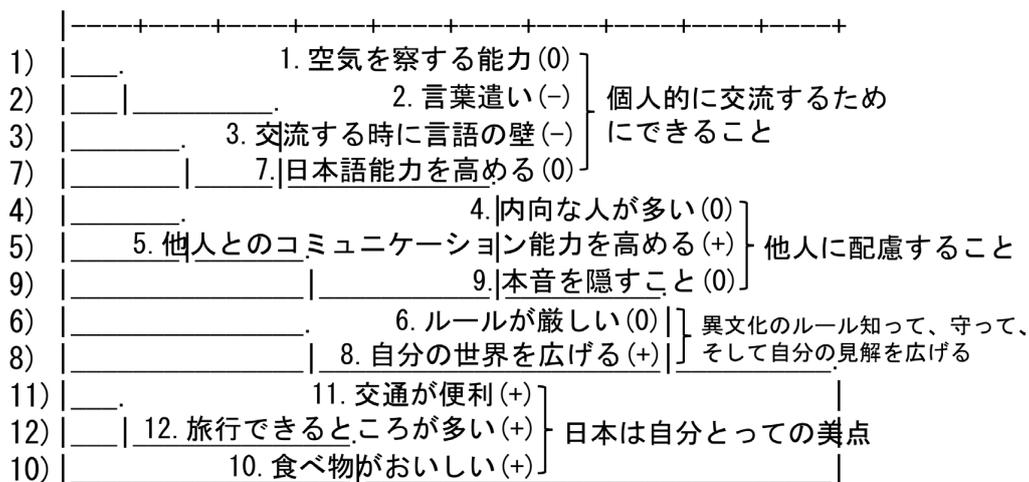


図1 対象Aのデンドログラム

3.2 対象Bの結果

図2は、対象Bのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Bは12個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1位、8位の2項目であった。クラスター2は連想項目順位6位、12位の2項目であった。クラスター3は連想項目順位2位、3位、4位、5位、9位の5項目であった。クラスター4は連想項目順位7位、10位、11位の3項目であった。

クラスター1は、1. 空気を読む力(0)、8. お店入りにくい(-)の2項目であった。対象Bは、結果を検討しクラスター名を「日本で暮らす女性の難しさ」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

なんとなく男性しか入れない雰囲気があるので、勇気を出してお店に入ると人の目が気になります。しかし、台湾にいと別の話です。なぜかという、台湾は自分生まれた時からずっと住んでいるところですので、その環境と雰囲気もう慣れたが、別に男性だらけのお店に入りにくいと思わないからです。そして、個人的な意見なんですが、社会的に台湾は日本より人の交流が温かいので安心感があります。台湾は男性と女性の区別もそんなに細かくないので、平等にその世界に生きている感じです。

クラスター2は、6. 内向的な人が多い(0)、12. 本音を言わない(0)の2項目であった。対象Bは、結果を検討しクラスター名を「日本人の特徴」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

個人的な意見ですが、内向的な人にとって、自分の意見とかを出すことは難しいので、本音まで言うのはあり得ないことだと思います。

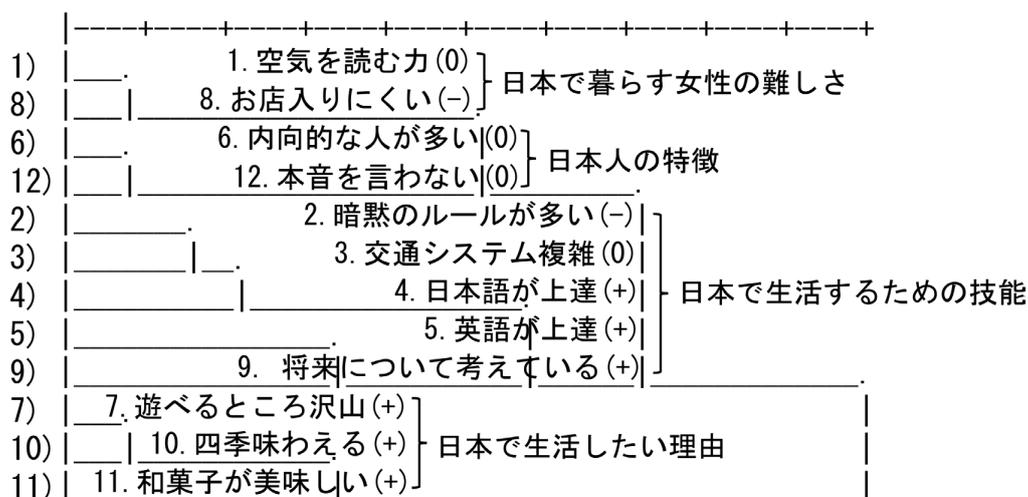


図2 対象Bのデンドログラム

クラスター3は、2. 暗黙のルールが多い(-)、3. 交通システム複雑(0)、4. 日本語が上達(+)、5. 英語が上達(+)、9. 将来について考えている(+)の5項目であった。対象Bは、結果を検討しクラスター名を「日本で生活するための技能」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

外国人として日本に生活するための技能だと思います。留学生なので日本人と話している時に実感したことです。日本語だけではなく英語も上達したら日本で生活したり、仕事を探したりする時もっと楽になるかもしれません。「2.暗黙のルールが多い」の部分は外国人にとって一番難しいことだと思いますが、実際に日本人に聞いても、何となくという返事だけだったので少し困ってます。

クラスター4は、7. 遊べるところ沢山(+)、10. 四季味わえる(+)、11. 和菓子が美味しい(+)の3項目であった。対象Bは、結果を検討しクラスター名を「日本で生活したい理由」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

日本に対するイメージで、自分にとって日本のいいところです。台湾は日本よりかなり小さいので、遊べる場所がないと言わないが、もう既に行ったところだから慣れていて行きがいがないと思います。なので、日本には遊べるところ沢山あるということは素晴らしいと感じました。そして、もちろん台湾にも四季があるが、日本に比べるとそんなに感じられません。例えば、秋になるともちろん紅葉狩りですが、台湾でなかなか味わえません。なので、四季味わえる日本が好きです。

3.3 対象Cの結果

図3は、対象Cのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Cは18個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1位、2位、4位、5位の4項目であった。クラスター2は連想項目順位3位、8位の2項目であった。クラスター3は連想項目順位7位、11位、12位、14位、15位の5項目であった。クラスター4は連想項目順位6位、13位、9位、10位、16位、17位、18位の7項目であった。

クラスター1は、1. 本音を言わない(0)、2. 時間を守る(+)、4. 嬉しい(+)、5. 人間関係を重視する(+)の4項目であった。対象Cは、結果を検討しクラスター名を「日本人の性格の特徴」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

「1. 本音を言わない」は、日本人の性格の特徴として現れやすいものの一つです。そして、その本音を理解できない場合には、悪い面もあると思います。「2. 時間を守る」「5. 人間関係を重視する」も日本人の性格の特徴だと思います。どの国の人たちも、このよ

うな性格の特徴を持っていてほしいと思います。そして、「4. 嬉しい」は、私が日本文化に触れて感じたことです。

クラスター2は、3. よく謝る (-)、8. 敬語が複雑 (-) の2項目であった。対象Cは、結果を検討しクラスター名を「苦手な日本語」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

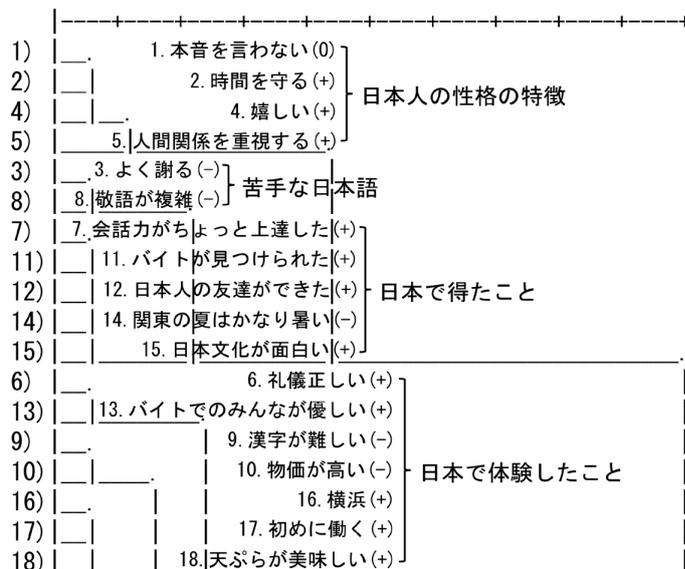


図3 対象Cのデンドログラム

「3. よく謝る」日本人はよく「ごめんなさい」と言います。日本人から謝ってもらうと、恥ずかしくなることがあります。「8. 敬語が複雑」日本語を勉強している外国人として、日本語の敬語はとても複雑で覚えるのが難しいと思います。また、敬語を使う場面で何度も間違っしまい、とても恥ずかしい思いをしました。

クラスター3は、7. 会話力がちょっと上達した (+)、11. バイトが見つげられた (+)、12. 日本人の友達ができた (+)、14. 関東の夏はかなり暑い (-)、15. 日本文化が面白い (+) の5項目であった。対象Cは、結果を検討しクラスター名を「日本で得たこと」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

これらは、私が日本で10カ月間で学んだこと、経験したことです。もしかしたら、日本に留学していなかったら、これらのことを経験することはなかったかもしれません。

クラスター4は、6. 礼儀正しい (+)、13. バイトでのみんなが優しい (+)、9. 漢字が難しい (-)、10. 物価が高い (-)、16. 横浜 (+)、17. 初めに働く (+)、18. 天ぷらが美味しい (+) の7項目であった。対象Cは、結果を検討しクラスター名を「日本で体

験したこと」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

これらも私が日本留学中に経験したことです。「16 横浜」は私が日本で行った場所のひとつで、横浜がとても気に入りました。

3.4 対象Dの結果

図4は、対象Dのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Dは10個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1位、3位、9位の3項目であった。クラスター2は連想項目順位2位、5位の2項目であった。クラスター3は連想項目順位4位、7位の2項目であった。クラスター4は連想項目順位6位、8位、10位の3項目であった。

クラスター1は、1. 日本人と交流が難しい (-)、3. 日本人と交流機会が少ない (-)、9. 日本で暮らすことはちょっと寂しい (0) の3項目であった。対象Dは、結果を検討しクラスター名を「コミュニケーション問題」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

日本語が下手ですから、自分の気持ちはそのままに表すことができないし、他の人が言ったこと聞き取れることができないから交流のことが大変難しいです。試験の準備をするので、他のことをする時間がないし、毎日自分で部屋に勉強します。ちょっと寂しさを感じます。

クラスター2は、2. 茨城の公共交通はとっても不便 (-)、5. 映画館が少ない (-) の2項目であった。対象Dは、結果を検討しクラスター名を「公共施設の整備性」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

映画が好きなので、一番近い映画館まで3kmからあるからちょっと遠いと思う。水戸市の映画館は一つしかなく、しかもその映画館の施設も古い。中国にはバスで5、10分くらいのところに映画館が一つはある。水戸は電車もなく、会館から〇駅行きのバスが1時間に一回しかないので、待ち時間が長い。

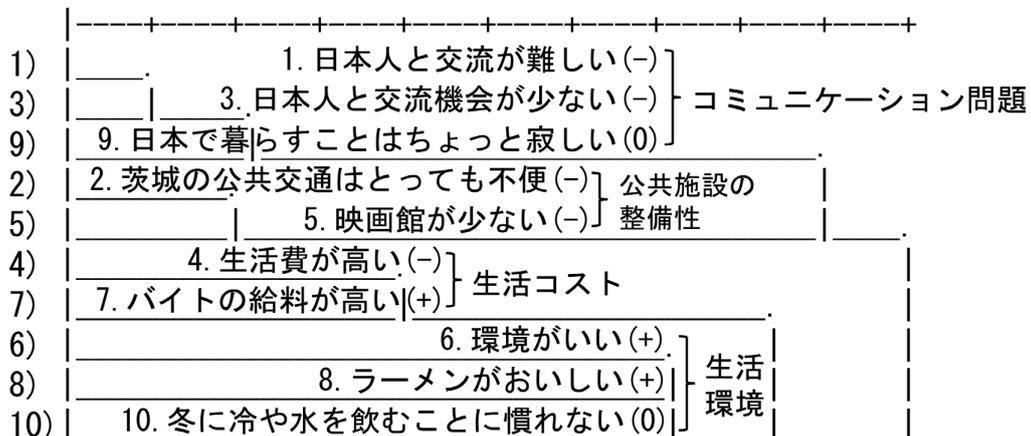


図4 対象Dのデンドログラム

クラスター3は、4.生活費が高い(-)、7.バイトの給料が高い(+)の2項目であった。対象Dは、結果を検討しクラスター名を「生活コスト」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

グループは費用に関するグループだ。電気代、ガス料、水道代等の生活費が高いと思う。特に冬は暖房をつけなければならないので、電気代は結構高い。日本はバイトの時給は1000円くらいなのに対して、中国は時給が400円～600くらい。

クラスター4は、6.環境がいい(+)、8.ラーメンがおいしい(+)、10.冬に冷や水を飲むことに慣れない(0)の3項目であった。対象Dは、結果を検討しクラスター名を「生活環境」とした。紙面調査の記述結果を斜体字で示す。

「6.環境がいい」「8.ラーメンがおいしい」「10.冬で冷や飲むことが慣れない」は、生活環境、慣習に関するグループになる。

4. 考察

対象Aから対象Dで形成されたクラスターの一覧を表1に示す。対象Aから対象Dにおいて、4つのクラスターが形成された(表1内に①から④としてクラスター名の前に記載)。クラスター名の後ろの(暮)と(交)は、後述する各対象のクラスターを「日本での暮らし」または「日本人との交流」に分類した結果を示している。各クラスターの後ろの括弧内の(暮)が「日本での暮らし」を、(交)が「日本人との交流」を示している。

本研究は、留学生が日本での暮らしと日本人との交流にどのようなイメージを抱いているかについて質的に検討することを目的としている。リサーチクエスチョンとして立てた、「日本での暮らし」と「日本人との交流」に対する留学生のイメージにはどのような質的な特徴がみられるかという点について、以下検討する。

対象Aから対象Dの留学生が日本での暮らしと日本人との交流にどのようなイメージを抱いていたか、形成されたクラスターと自記式解釈をもとに検討すると、対象Aは表1の「③ 異文化のルール知って、守って、そして自分の見解を広げる」と「④ 日本は自分にとっての美点」が日本での暮らしとしてクラスターが形成され、「① 個人的に交流するためにできること」と「② 他人に配慮すること」が日本人との交流としてクラスターが形成されたと解釈することが可能と考えられる。対象Bは表1の「① 日本で暮らす女性の難しさ」と「③ 日本で生活するための技能」と「④ 日本で生活したい理由」が日本での暮らしとしてクラスターが形成され、「② 日本人の特徴」が日本人との交流としてクラスターが形成された解釈することが可能と考えられる。対象Cは表1の「③ 日本で得たこと」と「④ 日本で体験したこと」が日本での暮らしとしてクラスターが形

成され、「① 日本人の性格の特徴」と「② 苦手な日本語」と「③ 日本で得たこと」と「④ 日本で体験したこと」が日本人との交流としてクラスターが形成されたと解釈することが可能と考えられる。対象Dは表1の「② 公共施設の整備性」と「③ 生活コスト」と「④ 生活環境」が日本での暮らしとしてクラスターが形成され、「① コミュニケーション問題」が日本人との交流としてクラスターが形成されたと解釈することが可能と考えられる。対象A、対象B、対象Dにおいては、「日本での暮らし」と「日本人との交流」にクラスター構造が分化しているのに対し、対象Cにおいては「日本での暮らし」と「日本人との交流」は未分化の構造をなしている点が、「日本での暮らし」と「日本人との交流」に対する留学生のイメージの1つの質的な特徴であると考えられる。

また、異文化間の相互理解を深めるためには、「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」の3方向(川那部2006)からのアプローチが重要であることも示されているが、本研究の対象Aから対象Dの自記式解釈においても「日本での暮らし」と「日本人との交流」に対しそれぞれの局面を示唆する記述が認められた。例えば、次の記述は日本での暮らしや日本人との交流をどのように捉えているかという「認知的局面」を示唆していると考えられる。

対象A：ルールが厳しいということは比較的なもので、いいところと悪いところもあります。そして、自分の世界を広げるは「あ、こういうルールがあるんだ、国によって違うんだね、勉強になったな」という感じです。

対象B：日本に対するイメージで、自分にとって日本のいいところです。

対象C：「1. 本音を言わない」は、日本人の性格の特徴として現れやすいものの一つです。そして、その本音を理解できない場合には、悪い面もあると思います。

表1 対象Aから対象Dが解釈したクラスター名の一覧
(表内の(暮)は「日本での暮らし」を(交)は「日本での交流」を示す)

対象A	対象B	対象C	対象D
① 個人的に交流するためにできること(交)	① 日本で暮らす女性の難しさ(暮)	① 日本人の性格の特徴(交)	① コミュニケーション問題(交)
② 他人に配慮すること(交)	② 日本人の特徴(交)	② 苦手な日本語(交)	② 公共施設の整備性(暮)
③ 異文化のルール知って、守って、そして自分の見解を広げる(暮)	③ 日本で生活するための技能(暮)	③ 日本で得たこと(暮・交)	③ 生活コスト(暮)
④ 日本は自分にとっての美点(暮)	④ 日本で生活した理由(暮)	④ 日本で体験したこと(暮・交)	④ 生活環境(暮)

同様に、次の記述は日本での暮らしや日本人との交流の際の心の動きを反映した「感情的局面」を示唆していると考えられる。

対象B：台湾は自分生まれた時からずっと住んでいるところですので、その環境と雰囲気もう慣れたが、別に男性だらけのお店に入りにくいと思わないからです。そして、個人的な意見なんですが、社会的に台湾は日本より人の交流が温かいので安心感があります。

対象D：試験の準備をするので、他のことをする時間がないし、毎日自分で部屋に勉強します。ちょっと寂しさを感じます。

また、次の記述は日本での暮らしや日本人との交流の際のふるまいに関わる「行動的的局面」を示唆していると考えられる。

対象A：例えば、私は日本人に対してのイメージは「内向な人が多い」「本音を隠すこと」で、この要素を含めて、自分は日本人とのコミュニケーションをする時になにを注意するべきではないかと考えてます。

対象B：外国人として日本に生活するための技能だと思います。留学生なので日本人と話っている時に実感したことです。

異文化理解教育に関する実践報告において、参加学生は異文化理解にまつわる重要事項や問題点に気づく体験を通し異文化交流実践への意欲に目覚めたことが示されている(川那部2006)。加えて、川那部(2006)では知識偏重の教育ではなく実践面の取り組みの重要性が強調されている。本研究の対象Aから対象Dでは、授業を通してではなく、留学先である日本での日常生活における実践を通し、認知的・感情的・行動的の局面において「気づき」を得て、認識を形成した可能性が考えられる。日本人学生の異文化理解意識に関わる要因の検討において、ステレオタイプの理解の抑制を促す異文化理解教育を行うことが重要であることが示されている(沼田2010)。留学生においても同様のアプローチが必要であると考えられるが、本研究の対象に限ると、留学先である日本での暮らしや日本人との交流を通し、留学生は多くを学び取っている可能性が考えられる。

医療の場における異文化理解の検討では、文化的知識および文化的技能を獲得するために、文化的気づきの重要性が示されている(大野2016)。文化的気づきとは、異文化に属する対象者に向き合うとき、自分の思い込みや偏見などに気づくことであり、文化的気づきがなければ自分の思い込みの枠の外にある異文化に思い至らないため、誤解や紛争、押しつけの危険が生じる(Campinha-Bacote2002、大野2016)と説明されている。留学生のサポートに関わる者にとっても、文化的な気づきは重要な概念である。文化的気づきは、自文化と他文化の2つの側面があると思われるが、本研究の結果は他文化に対する気づきの質的な構造を示していると考えられる。また、横田(1991)で指摘されてい

るように、(1) 日本の慣習、(2) 言葉の障壁、(3) 関係づくりへの抵抗感、(4) 興味なし、余裕なし、(5) 希薄な主張、が日本人学生と留学生の親密化阻害要因になる恐れがある。以下に挙げる本研究における自記式解釈においても、(1) から (5) に当てはまると思われる記述が見られた。先行研究の知見や本研究におけるPAC分析の結果などを組み合わせることにより、留学生の異文化相互理解を阻害する要因を一定程度予測し対処することができるかもしれない。

対象B:「2. 暗黙のルールが多い」の部分は外国人にとって一番難しいことだと思いますが、実際に日本人に聞いても、何となくという返事だけだったので少し困ってます。

対象C:「1. 本音を言わない」は、日本人の性格の特徴として現れやすいものの一つです。そして、その本音を理解できない場合には、悪い面もあると思います。

対象C:「8. 敬語が複雑」日本語を勉強している外国人として、日本語の敬語はとても複雑で覚えるのが難しいと思います。また、敬語を使う場面で何度も間違ってしまう、とても恥ずかしい思いをしました。

対象D:日本語が下手ですから、自分の気持ちはそのままに表すことができないし、他の人が言ったこと聞き取れことができないから交流のことが大変難しいです。

本研究の結果は、留学生のサポートに携わる者が、留学生の異文化に対する認識を理解する一助になるだけでなく、日本人学生に新たな視座を与える情報になりうると考えられる。留学生が日本人学生の異文化理解に果たす役割 (中野2006) や日本人学生と留学生が共に学ぶ意義 (高橋2005) や日本人学生と留学生との異文化間交流 (加賀美1999) などにおいて、留学生が日本人の異文化理解に対し一つの役割を果たすような教育プログラムの開発が、本研究の結果の応用として考えられる。例えば、本研究の結果を日本人学生と留学生のディスカッションの材料として双方向の異文化理解を促すことも可能であろう。また、対象の内面へのアプローチや対象自身の問題について気づきをもたらすことなども可能 (内藤1997) とのPAC分析の応用例を参考に、留学生自身の文化的気づき (Campinha-Bacote2002, 大野2016) を促す素材としての応用も可能であると考えられる。

5. 結語

本研究は留学生が日本での暮らしと日本人との交流にどのようなイメージを抱いているかについて質的に検討することを目的とした。4名の対象のPAC分析結果を検討したところ、3名は「日本での暮らし」と「日本人との交流」を示唆するクラスター構造が認められた。1名は「日本での暮らし」と「日本人との交流」のクラスター構造は未分化であった。また、対象Aから対象Dは留学先である日本における実践を通し、認知的・感情的・行動的の局面において「気づき」を得て、認識を形成した可能性が示された。本研究の結果は、留学生サポートに関わる者に留学生を理解する資料を提供するだけにとどまらず、日本人と留学生相互の異文化理解を促

す素材としても応用可能であることが示唆された。また、PAC分析結果を通し、留学生自身に気づきをもたらすような応用の可能性も示された。

謝辞. 本研究の一部は科学研究費補助金(23K00601, 23K20472) の助成を受けて行われた。

引用文献

- 青木香代子・安龍洙 (2018)「日本社会における東南アジア出身交換留学生の異文化理解に関する一考察」茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究1, 3-28
- 石鍋浩・安龍洙 (2018)「日本社会における英語圏交換留学生の異文化理解に関する一考察」茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究1, 57-68.
- 井出慶子 (2010)「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案 -異文化間コミュニケーション能力理論と実践から-」言語文化教育研究9, 65-90.
- 大野直子 (2016)「医療の場における異文化理解」順天堂大学国際教養学部紀要順天堂グローバル教養論集1, 70-79.
- 加賀美常美代 (1999)「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」コミュニティ心理学研究2 (2), 131-142.
- 川那部和恵 (2006)「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」教育実践総合センター研究紀要15, 52-60.
- 坂本利子 (2013)「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか-多文化共生力育成をめざして-」立命館言語文化研究24 (3), 143-155.
- 園田博文・奥村圭子・内海由美子・黒沢晶子 (2006)「留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの-「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて-」山形大学紀要 (教育科学) 15 (1), 11-33.
- 高橋亜希子 (2005)「日本人学生と留学生が共に学ぶ意義-『異文化間教育論』受講者のコメント分析から-」宮城教育大学紀要40, 15-25.
- 内藤哲雄. (1997)「PAC分析の適用範囲と実施法」人文科学論集31, 51-88.
- 沼田潤 (2010)「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査-異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究-」評論・社会科学91, 169-186.
- 中野はるみ (2006) 異文化教育における留学生の役割」長崎国際大学論叢6, 55-64.
- 松田勇一・安龍洙 (2018)「日本社会における中国人交換留学生の異文化理解に関する一考察」茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究1, 69-84.
- 横田雅弘 (1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」異文化間教育5, 81-97
- Campinha-Bacote, Josepha. (2002) The Process of Cultural Competence in the Delivery of Healthcare Services: a model of care. Journal of Transcultural Nursing13 (3), 181-184